

精神障害者の脱施設化・脱精神科病院を阻む 3 つの要因

－入院中心処遇をささえる外来医療と精神科病院スタッフの脱施設化－

沖縄国際大学人間福祉学科

知名 孝

精神科領域の脱施設化が議論されて久しくなりますが、必ずしも満足の行く結果になっていないというのが多くの関係者の意見であるようです。日本精神科リハビリテーション学会誌で門屋氏がその不十分さを訴えていたり（門屋、2011）、少し驚いたのは朝日新聞が精神障害者の地域移行の動きの鈍さを指摘する社説を掲載していたというのもあります（朝日新聞社説 2014 年、1 月 24 日）。多くの場合「退院がすすまない現状」を中心に論じていることが多いようです。しかし、私は本当に「退院する・しない」が問題なのだろうかと思ったりするのです。言いかえると問題は「入院」（だけ）なんだろうかってことです。もちろん入院の長期化は重要な課題なんだろうが、取り組むべき順番はそこが先なんだろうかと思ってしまう。すなわち、精神障害者の地域移行の問題を考えた時、入院の長期化そのものよりも、（社会的入院の構造を支えてきた）外来医療のあり方の問題、もっと言えば、入院施設（精神科病院）が外来医療も提供していることの問題に注目してしまうんです。

<脱施設化を阻む要因 1 外来医療～入院中心を構造的に支えてきた外来医療の在り方>

日本では「当然」のように、入院治療を行った同じ医療施設で退院後の外来通院を続けることが多いですね。しかしその「当然」が阻害要因ということはないでしょうか。外来医療を提供する医療施設（法人）と、入院治療を提供する医療施設が役割分担されていないということです。「日常性」や「(地域)生活性」に寄り添うことが外来医療の目的だとすると、日常生活から離れた「非日常的」治療時空間が入院医療ということになります。そう考えると、外来医療と入院医療が分離することは、脱施設化・脱精神病院化をすすめていく前提条件のように思えるのです。その環境が十分整わないまま、入院患者のみを地域移行という我が国の取り組みが、困難に遭遇するのはあってもおかしくない話のように思えるのです。

外国の制度を見てみると、慢性精神疾患をかかえた精神障害者への外来医療は、入院病棟をかかえる精神科病院で提供されている割合は低いように思います。統合失調症のよう

な慢性疾患となれば、外来クリニックで提供されているケースでさえも結構少ないのではないかと思います。結局精神科病院やクリニックといった医療施設よりも、地域の生活支援施設や相談支援施設に併設された外来医療部門で提供されていたりするわけです（知名、2011）。日本のシステムで考えれば、地域生活支援センターや生活訓練施設で、週何回か外来医療を提供するわけです（※医療スタッフは非常勤の場合が多い）。そこでお薬もらったり、ある程度の救急に対応してもらったりと、精神科病院の外来医療部門がやっていることを地域の事業所がやってしまう。制度的には、現行の福祉サービス報酬制度に医療加算を設定する必要もあるでしょうし、福祉事業所とされているところで外来医療行為ができるような法整備が必要になるのだらうとも思います。

社会的入院というのは、入院治療が日常生活そのものになってしまっているという、人間の生き方の構造的な問題のことです。脱施設化・脱精神科病院化のためには、入院医療を非日常的治療空間にすることを考える必要があるわけです。そのためには、入院以外の医療サービスを、入院医療現場から分離して日常生活空間（＝地域生活支援のメニューのひとつになる）にお引越す必要がある。現在精神科病院がかかえている外来医療（そして付設のサービス）が、入院治療の機関と経営主体（法人）から離れて、日常生活を支援するための独立したシステムと経営主体として存在する必要があるのかもしれない。患者さん達を地域移行（「地域行こう！」）する前に、医療サービスそのものが地域移行する必要があるということでしょう。医療機関に行かなくても生活現場で（外来）医療サービスを受ける環境というのが、地域医療の本質だらうし、外来医療の日常生活の時空間への「お引越し」にはならないのでしょうか。

<脱施設化を阻む要因 2 当事者の生活の場に対する愛着形成の問題>

脱施設化を阻む要因の二つ目は、人が当然に抱く愛着形成の機能だと思うのです。人は必ずしも自らが好んだ・選んだ場所でなくても、長い時間（歴史）とともに日常生活が存在する場所に対して、なんらかの愛着が形成される。その愛着から脱して行くことは、どんな人にとっても不安を喚起するものだらうと思うのです。多くの精神障害者にとって、特に長期入院者にとって、退院とともに生活環境が変化し、脱愛着していくことに抵抗感が存在してもおかしくない。

先日ある相談支援事業所のワーカーさんが、「退院に向けて取り組みをはじめても、長期入院者になるほど本人との人間関係つくるのも時間かかるし、なかなか難しいところがある…」とぼやいていました。外来医療と入院医療が密着した日本の制度では、多くの入院患者さんにとって、入院している病院のほうが、地域の相談支援事業所や地域そのものよりも「なじみ感（日常感）」＝愛着を抱いていてもおかしくない。病院スタッフ側も、患者さんに対する愛着感や責任感が「うちの患者さん」という、ある種の所有感じみ言説として表れてもおかしくないわけです。退院促進を行う相談事業所のワーカーからすると、（自分の事業所ではない）「他の病院の患者さん」を「他の病院」に行って退院にむけての

相談をするわけで、ある種の「アウェー感」に包まれながら他院促進業務をすることになる。

10数年前にロス・アンゼルスにあるヴィレッジのリチャード・ヴァンホーン氏が沖縄で講演したときに、「うちのメンバーさんが入院したときには、うちのドクターとスタッフがその病院に行って診察して退院するまでケアをする」と述べている。「うちのメンバー」と言われる人（メンバーさん）たち自身の「愛着」をよせる支援機関が、入院も外来もする精神科病院にあるのか、地域生活支援をかねた生活密着型の外来医療施設にあるのかは、その人の人生選択にも少なからず影響してもおかしくないような気がします。

<脱施設化を阻む要因 3 病院職員の脱施設化・地域移行>

脱施設化・脱精神科病院化にむけてのもうひとつの課題は、「病院で勤務する職員の脱施設化・地域移行」だろうと思うのです。沖縄で行われた精神障害者リハビリテーション学会分科会で、精神科病院から地域支援施設へ転職された OT さんの報告がありました。井上さんという OT さんですが、病院から地域事業所への転職にともなう実践の変化と戸惑い、そして再適応のプロセスについて発表されていました（井上、2012）。精神科病院から地域の事業所やクリニックに転職した方々は、みな口をそろえて実践がまったくちがうとおっしゃいますね。私は井上さんの学会発表に対して、PSW 含む多くの病院スタッフは、「（実践を裏打ちする文化が）施設化されている、だから病院スタッフの脱施設化・地域移行が必要」というコメントを申し上げたら、座長の寺谷隆子先生が大きくなずいていらっしやいました。私もサンフランシスコにあるカリフォルニア・パシフィック・メディカルセンター精神科で働いた後に、日本の精神科病院そして心療内科クリニック勤務（しながら地域支援施設づくり）へと転職してきました。実は最もカルチャーショックを経験したのは、国が変わった時よりも、日本国内の精神科病院から心療内科クリニックへの転職した時でした。何といても、医者から入院の指示が少なくなる。当然ですが精神科病院には入院施設がついてますが、クリニックの場合は病棟がないのがほとんどです。入院となると病院さんに連絡・調整して、家族・本人に説明して…、とどうしても作業が多くなる。病院の時よりも、点滴を毎日続けたり、地域の相談支援や訪問看護事業所さんの見守りでなんとか入院せずに引っ張ってきたケースっていうのが結構あると思います。

人は自らの経験にもとづいてしか、ものごとの評価をしないところがある。そう考えると、病院スタッフは病院で培ってきた実践の範囲でしかノーマライゼーションや脱施設化について認識せざるをえない。現在病院（あるいは医療法人）で勤務する人たちがどうやって地域で実践・経験する（＝働く＝転職する）ことができるようになるかということも、脱施設化・脱精神科病院化の重要な課題なんだろうと思うのです。

いろんな限界があるにせよ、モデル事業でもよし、現在の障害福祉サービスへの医療加算というかたちでもよし、何らかの「試行」をもとにして「思考」を重ねていく必要があ

るのではないのでしょうか。そういう試行と思考のなかから、1) 外来医療を入院医療から分離させ、2) 外来医療サービスと地域生活支援サービスをミックスしたサービス提供を可能にし、3) いわゆる医療機関に行かなくてもある程度（少なくともルーチンレベル、できればある程度のクライシス介入）の外来医療を提供できる環境を整え、4) 精神科病院から地域支援・外来医療へ転職が可能な環境をつくることで、より多くの入院者にとって地域生活が人生の選択肢となっていければと思います。文中紹介した文献のリスト

【文中紹介した文献】

- 門屋充郎（2011） 「我が国における精神保健福祉改革の最新動向と将来展望」 精神障害とリハビリテーション 15（1）；126-127
- 井上苑子（2012） 「病棟から地域へー自信のなさから見えたもの」 日本精神障害者リハビリテーション学会第21回沖縄大会抄録集 p114
- 知名孝（2011） 「サンフランシスコ市 CBHS に見るパラダイムシフト」 精神障害とリハビリテーション 15（1）；47-53
- 知名孝（2008） 「ポスト脱施設化時代（？）のアメリカ」 精神保健福祉 39（2）；154-155
- 朝日新聞社説（2014年、1月24日）「(社説) 精神科医療一病院と地域の溝うめよ」 朝日新聞